

児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性、引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚

前 田 健 一¹

PEER RELATIONS AND LONELINESS IN CHILDHOOD : CHILDREN'S PEER AND SELF-PERCEPTIONS OF THEIR AGGRESSION, WITHDRAWAL, AND SOCIAL COMPETENCE

Kenichi MAEDA

The purpose of this study was to examine whether peer status groups and subgroups differed in terms of loneliness, peer perceptions and self-perceptions of their aggression, withdrawal, and social competence. Five status groups of children (popular, rejected, average, neglected, and controversial) were identified on the basis of positive and negative sociometric nominations for 459 children in Grades 3 through 6. Of these groups, 200 children were selected on the basis of peer perceptions of aggression, withdrawal, and social competence to represent the following 8 subgroups : high-competent popular (HCP), low-competent popular (LCP), aggressive rejected (AR), withdrawn rejected (WR), aggressive-withdrawn rejected (AWR), high-withdrawn neglected (HWN), low-withdrawn neglected (LWN), and typical average (TA). Consistent with previous findings, the rejected children were viewed by peers as significantly more aggressive, withdrawn, and socially incompetent with higher levels of loneliness than average and popular children. Children in the AWR, WR, and HWN subgroups were found to be significantly more lonely and exhibited more inaccurate self-evaluations in aggression or withdrawal than typical average children.

Key words : peer status groups, subgroups, loneliness, peer perceptions, self-perceptions

子どもの仲間関係は、社会的適応に必要な知識・技能・行動様式を学ぶ社会的学習の環境と機会を提供する。長期にわたって仲間集団から孤立したり仲間から拒否されることは、子どもの情緒的・精神的健康に否定的影響を及ぼすだけでなく、社会的スキルや社会的コンピタンスの発達を阻害すると考えられる (Asher & Parker, 1989)。この考えに従うと、一般に仲間から拒否される子ども (以下R児と略す) や無視される子ども (以下N児と略す) は、人気のある子ども (以下P児と略す) や平均的な子ども (以下A児と略す) よりも社会的発達が未

熟であり、社会的スキルや社会的コンピタンスに乏しいと予想される。子どもの仲間関係に関する研究は、これまで多様な情報源 (たとえば、仲間、教師、親、自己報告、行動観察) を利用しながら、この予想を支持する実証的証拠を示してきた (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990 ; 前田, 1994 ; 前田・片岡, 1993 ; 佐藤・佐藤・高山, 1988, 1990)。その結果、仲間拒否や社会的孤立と関連する諸特徴だけでなく、子どもの社会的適応問題の性質、その原因、後年の適応状態に及ぼす影響についても次第に明らかになってきた。また、その知見は子どもの社会的適応問題や仲間関係の改善を目指した介入指導プログラムの開発に利用され (Matson & Ollendick, 1988 ; Pope,

1 愛媛大学教育学部 (Ehime University)

McHale, & Craighead, 1988), 一定の実践的成果をあげている(前田・高橋, 1993; 佐藤・佐藤・高山, 1993a, 1993b)。

佐藤他(1988)は小3と小6の各学年からP児, R児, N児を20名ずつ選出して, 彼らが仲間からどう見られているか(仲間知覚)について比較している。その結果, 攻撃性はR児群がN児群やP児群よりも多く, 引込み思案傾向はR児群が最も多く, 次にN児群となり, P児群が最も少なかった。それに対して好意性はP児群が最も多く, 次にN児群となり, R児群が最も少なかった。また佐藤他(1990)は小3～小6の各学年からP児, R児, N児, A児を20名ずつ選出し, 孤独感と抑うつ感の自己報告測度について比較している。その結果, 孤独感も抑うつ感もR児群が最も多く, P児群が最も少なかった。N児群はA児群と差がなく, 両群はR児群とP児群の中間に位置していた。

他の多くの研究も, R児群は他の地位群よりも一貫して攻撃性のような外的な問題行動(Coie & Dodge, 1988; 前田, 1994; 前田・片岡, 1993)や孤独感のような内的問題を強く抱えていると報告している(Asher & Wheeler, 1985; Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990; Cassidy & Asher, 1992; Crick & Ladd, 1993)。しかし最近の研究は, R児群それ自体も同質の群ではなく, 攻撃性や孤独感を強く示す者とそうでない者が混在していると考え, R児群を2つの下位群に分類して比較している。その結果, 攻撃的R児群は非攻撃的R児群よりも身体的攻撃や破壊的行動を多く示すが, 非攻撃的R児群は攻撃的R児群よりも恥ずかしがりで消極的であった(Bierman, Smoot, & Aumiller, 1993)。また, 孤独感では攻撃的R児群とA児群間に差はないが, 服従的R児群はA児群よりも強かった(Parkhurst & Asher, 1992)。

Patterson, Kupersmidt, & Griesler (1990)は小3と小4の児童515名の中から, 5つの地位群とR児群の2つの下位群(攻撃的R児群と非攻撃的R児群)を選出し, 社会的受容, 学業, 行動および全般的自己価値の4つのコンピタンス領域に関する自己知覚を比較している。その結果, 社会的受容領域ではP児群やC児群(ある仲間からは人気があるが, 他の仲間からは拒否されている群)がN児群よりも多く, 行動領域ではP児群がN児群やR児群よりも多かった。N児群やR児群は自分でも仲間から好かれていないとか, 適切な行動をしていないと自己知覚していたのである。興味深いことに, これらの主観的な自己知覚得点と仲間・教師評定による客観的得点とを比較した結果, P児群やA児群は客観的得点よりも自己の社会的受容を過小評価するのに対して, R児群は客観的得点以上に仲間から好かれていると自

己を過大評価していた。行動領域でもN児群は適切な行動をしていないと自己を過小評価したが, R児群は適切な行動をしていると自己を過大評価していた。しかも, この過大評価傾向は社会的受容領域ではR児群の両下位群に共通し, 行動領域では攻撃的R児群のみに顕著に見られた。これらの結果から, R児群, とりわけ攻撃的R児群は自分の地位や問題行動の自覚に乏しく, そのため自分の攻撃的行動を改めることも少なく, その結果として否定的な仲間関係を持続させるのではないかと示唆される。もしそうであれば, 拒否される子どもの仲間関係や社会的適応を改善しようとする社会的スキル訓練では, 単に攻撃的行動の低減を目標とするだけでなく, 同時に彼らの自己知覚を改善する認知行動療法的な試み(Matson & Ollendick, 1988; Pope, et al., 1988)を併用する必要があるといえる。しかし現在のところ, 自己知覚と他者知覚のズレを調べた研究は少ないので, 多様な社会的特徴次元について地位群間や下位群間の比較をきめ細かく検討し, 不正確な自己知覚の問題はR児群とその下位群だけに見られるのか, あるいは他の地位群や下位群にも見られるのかを明らかにしなければならない。

本研究の第1目的は小3～小6の児童をP児群, R児群, N児群, A児群およびC児群に分類し, 孤独感, 社会的行動特徴の仲間知覚と自己知覚および両知覚間のズレ得点について5地位群間で比較することである。これは下位群間比較をする前に, 地位群間差の結果について以前の研究と本研究の一致度を確かめておく必要があると考えたからである。Patterson, et al. (1990)は社会的受容, 学業および行動領域の客観的得点として, ソシオメトリック平均評定値, 読み・算数・言語のテスト得点および学級適応評定尺度の教師評定得点を使用していた。これらの客観的得点は多様な内容や特徴を総合した得点であり, 客観性は高いかもしれない。しかし, 具体的な社会的行動特徴ごとに客観的得点と主観的得点とを対応づけたものではない。そこで本研究では, 仲間知覚と自己知覚の項目内容や項目数を統一し, 仲間知覚の得点を客観的得点として使用した。これによって, 攻撃性, 引込み思案および社会的コンピタンスの各行動特徴別にどの地位群が仲間知覚と自己知覚のズレが大きいかを検討できる。なお, C児群は仲間からの人気度も高いが, 同時に拒否される程度も強い地位群である。C児群の両面性は行動特徴にも見られ, R児群と同様に攻撃性を強く示す反面, 社会的コンピタンスではR児群よりも優れており, 孤独感や引込み思案傾向も比較的少ないと報告されて

いる (Asher & Wheeler, 1985; Coie & Dodge, 1988; 前田・片岡, 1993; Parkhurst & Asher, 1992)。ただし、地位分類をするとC児群は極めて少数となり(本研究では3.7%)、対象児数の少ない研究はC児群を除外していることが多く、C児群の情報は乏しいのが現状である。本研究ではC児群を17名選出できたので、他の地位群と比較しながらC児群の孤独感、社会的行動特徴の仲間知覚と自己知覚および両知覚間のズレを1つの研究の中で明らかにすることができる。

上述の研究結果を参考にすると、孤独感と仲間知覚では次のような結果が予想される。(1)孤独感はR児群が最も多く、P児群が最も少なく、N児群やA児群はその中間であろう。(2)攻撃性の仲間知覚ではR児群やC児群が多く、N児群やP児群は少ないだろう。引っ込み思案ではN児群やR児群が多く、C児群やP児群は少ないだろう。社会的コンピタンスではP児群やC児群が多く、N児群やR児群は少ないだろう。自己知覚の研究は少ないが、Patterson, et al. (1990)の研究結果から、仲間知覚の結果とほぼ同様になると予想される。しかし、(3)ズレ得点ではR児群やC児群はP児群やA児群よりも、否定的特徴である攻撃性では仲間知覚よりも少ないと自己を過小評価し、肯定的特徴である社会的コンピタンスでは仲間知覚以上に多いと自己を過大評価する傾向にあると予想される。

本研究の第2目的はR児群を攻撃的R児群 (AR群)、引っ込み思案R児群(WR群)、攻撃的かつ引っ込み思案R児群(AWR群)の3下位群に、P児群を社会的コンピタンスの高いHCP群と低いLCP群の2下位群に、N児群を引っ込み思案傾向の高いHWN群と低いLWN群の2下位群にそれぞれ分類し、典型的なA児群(TA群)との比較を通して、各下位群の特徴を明らかにすることである。以前の下位群間比較の研究には、いくつかの問題点と限界があると指摘できる。第1に、R児群を2つの下位群にしか分類していない。Hymel, Bowker, & Woody (1993)は小4と小5から非人気児を選出した後、攻撃群(A群)、引っ込み思案群(W群)および攻撃的・引っ込み思案群(AW群)の3下位群に分類している。その結果、学業的コンピタンス領域ではAW群が仲間知覚よりも優れていると自己を過大評価し、社会的コンピタンス領域ではA群やAW群が仲間知覚以上に人気があると自己を過大評価していた。これらの結果はA群やAW群の自己知覚がW群よりも不正確であることを示すものである。しかし、Hymel, et al. (1993)は下位群分類の基準としてソシオメトリック平均評定値を使用していた。これは、仲間

受容度を表わす一次元の指標であり、子どもを人気児と非人気児に大別できても、非人気児をさらにR児群とN児群に区別できないと指摘されている (McConnell & Odom, 1986)。彼らはR児群とN児群を区別しないで両群を非人気児として扱っていたので、その下位群であるW群は本研究のWR群とHWN群の混合群であった可能性が強い。本研究では二次元の指名法測度を組合わせてR児群とN児群を区別してから、それぞれを下位群に分類した。したがって、Hymel, et al. (1993)の下位群分類の問題点を解消できる。

第2に、下位群間比較の研究はもっぱらR児群の下位群に焦点を当て、P児群やN児群の下位群には関心を寄せていない。おそらく、仲間関係や社会的適応の問題を抱えやすいR児群の特徴や原因を探究することが何よりも大切だからであろう。しかし Hymel, et al. (1993)から示唆されるように、R児群の全員が強い攻撃性を示すわけではないのと同様に、P児群やN児群の中にも異なる特徴を示す下位群が存在すると考えられる。たとえば、人気度に影響する要因は協力行動や援助行動などの社会的特徴だけとは限らない。学力、運動能力、身体的魅力などの非社会的特徴も人気度に影響を与える (McConnell & Odom, 1986)。あるいはP児群の中には適切な社会的スキルやリーダーシップを発揮するために人気のある者と仲間の依頼や要求を受け入れる寛容さを示すために人気のある者が混在しているかもしれない。同様に、N児群の中にも仲間関係を求めながら引っ込み思案のために目立たず仲間から無視されている者や他の理由で無視されている者が混在していると考えられる。おそらく、後者よりも前者のN児群の方が仲間関係の不全感から生じる孤独感を強く感じているだろう。残念ながら、以前の研究はP児群とN児群の下位群間比較を行っていないので、これらの下位群間にどのような特徴差があるのか分かっていない。その意味で、本研究は今後R児群以外の地位群をいくつかの下位群に分類する必要があるか否かについて基礎的な情報を提供できる。

第3に、下位群間比較の研究はA児群との比較からR児群の下位群の特徴を明らかにしているが、A児群はソシオメトリック指名法と仲間知覚法の結果を組合わせて構成した典型的なA児群でない場合が多い (Parkhurst & Asher, 1992; Patterson, et al., 1990)。本研究では攻撃性、引っ込み思案、社会的コンピタンスのいずれも平均的なA児群(TA群)を構成し、下位群間比較の比較群とした。したがって、以前の研究よりも各下位群の特徴が明確になると考えられる。

R児群の3つの下位群およびP児群やN児群の下位群を比較した研究は乏しいが、上述の研究結果を参考にすると、次のような結果が予想される。(4)孤独感はAWR群、WR群、HWN群が多く、AR群やLWN群の孤独感は比較的少ないだろう。(5)攻撃性の自己知覚はAWR群やAR群が多く、引っ込み思案ではHWN群やWR群が多く、社会的コンピタンスではHCP群が最も多いだろう。(6)否定的特徴である攻撃性や引っ込み思案のズレ得点では、R児群の3下位群とHWN群が仲間知覚よりも少ないと自己を過小評価するだろう。それに対して、肯定的特徴である社会的コンピタンスのズレ得点ではHCP群が最も自己を過小評価し、AWR群、AR群およびLWN群は自己を過大評価する傾向にあるだろう。

方 法

対象児 対象児は愛媛大学教育学部附属小学校の3年生116名、4年生118名、5年生111名および6年生114名の合計459名であった。自己知覚の実施可能性や信頼性および以前の研究結果との比較を考慮して、これらの学年を対象として選んだ。

手続 以下の調査は放課後の約1時間を利用し、各学年の3クラスとも同時間に平行してクラス単位で集団で実施した。調査者は各クラスとも女子大学生であった。調査の実施にあたっては最初に調査目的の要点を次のように説明した。「私達は大学で子どもの友達関係について研究しています。私達は小学生の皆さんがいろんな人と友達になるために、どんなことに気をつけているかを知りたくて、この調査をすることにしました。皆さんの答えは、全部一緒にまとめて分析します。だから、誰が誰のことを書いたか分からなくなります。また皆さんの答えは先生にも見せません。ですから、皆さんは自分の答えを誰かに見られる心配はありません。自分の思ったとおりに正直に答えて下さい」。この後、近くの友達と見せ合ったり、相談しないように注意を与えて、調査を実施した。なお、ソシオメトリック指名法で否定的指名を求めることは、実施後の仲間関係に否定的影響を及ぼすと懸念されてきたが、これが有害であると実証する証拠も無害であるという反証もこれまで報告されていない (McConnell & Odom, 1986)。しかし、本研究ではこの点を考慮して、どの質問についても当てはまる子がない場合や記入したくない場合は書かなくてもよいことを十分に理解させてから、調査への協力を求めた。

(1)ソシオメトリック指名法：クラスの同性仲間全員

の名簿を印刷した用紙を渡し、「クラスの中で一緒に遊びたい子」(肯定的指名)と「クラスの中で一緒に遊びたくない子」(否定的指名)をそれぞれ3名以内ずつ選択し、その仲間の名簿番号を回答欄に記入させた。

(2)ソシオメトリック評定法：「クラスの友達とそれぞれのくらい一緒に遊びたいと思うか」について、クラスの同性仲間全員を3段階で評定させた。

(3)仲間知覚指名法：次の9項目の質問を印刷した用紙を見ながら、それぞれの質問に該当する同性仲間の名簿番号を3名以内ずつ回答欄に記入させた。自分からあまり話しかけない子(項目1)。自分から言い争いやけんかをしかける子(項目2)。たくさんの友達と仲良く遊ぶのが上手な子(項目3)。自分の思いどおりにならないと、すぐに怒る子(項目4)。友達に親切で、みんなのことをよく考える子(項目5)。おとなしくて、あまり目立ちたがらない子(項目6)。他の子によく命令する子(項目7)。友達とあまり遊ぼうとしない子(項目8)。みんなのリーダーとなって、友達をうまくまとめる子(項目9)。

(4)自己知覚評定法：質問項目は仲間知覚指名法と同様であるが、自己評定に適合するように一部表現を変えた。たとえば、「自分からあまり話しかけない子(項目1)」の場合には「友達に自分からあまり話しかけませんか」という表現に変えた。対象児はそれぞれの質問に対して、自分がどの程度当てはまるかを3段階で自己評定した。

(5)孤独感評定法：Asher & Wheeler (1985)を参考にして、次の11項目を用意し、各項目について3段階で自己評定させた。小学校で、新しいお友達とすぐに仲良くなれますか(項目1)。小学校で、お話するお友達はいますか(項目2)。小学校で、一人ぼっちだと思いますか(項目3)。小学校で、お友達と仲良く遊んでいますか(項目4)。小学校では、たくさんお友達がいますか(項目5)。小学校では、お友達がなくて淋しいですか(項目6)。小学校で遊ぶとき、すぐに遊び友達が見つかりますか(項目7)。小学校で、仲良しの友達をつくるのは難しいですか(項目8)。小学校で、みんなから仲間はずれにされていると思いますか(項目9)。誰かに手伝ってほしいとき、頼めるお友達はいますか(項目10)。お友達は、あなたのことを好きだと思いますか(項目11)。孤独感評定法の実施にあたっては、まず最初に「あなたは、アイスクリームが好きですか」と「今日の朝ご飯はパンを食べましたか」の2つの質問を実施し、回答の仕方を理解させた。また「お家ではテレビをたくさん見ますか」、「絵を描くのは好きですか」、「運動場で遊ぶ

のは好きですか」の3つの質問を孤独感質問項目の2～3項目ごとに挿入した。

得点化の方法 (1)ソシオメトリック指名得点：まず対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。本人を除く同性仲間の人数は欠席などによりクラス間で多少異なり、16名～19名の範囲であった。したがって、それぞれの合計指名数は最小0～最大19の範囲にわたる。そこで、それぞれの合計指名数を本人を除く同性仲間数で除算し、仲間一人当たりからの指名数を算出した。その後、同一学年の同性3クラスの平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点(肯定的指名得点=L得点, 否定的指名得点=D得点)から、社会的好み得点(SP得点=L-D)と社会的影響力得点(SI得点=L+D)を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を表わし、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表わす。SP得点とSI得点はそれぞれL得点とD得点の合成得点である。

(2)ソシオメトリック平均評定値：対象児ごとに仲間から遊びたいと評定された程度に応じて1点～3点を配点し、同性仲間全員から受けた評定値を合計した。本人を除く同性仲間数は16名～19名の範囲であるから、評定値の合計得点は最小16点～最大57点の範囲にわたる。この合計得点を評定した同性仲間数で除算して仲間一人当たりからの平均評定値を算出した。この平均評定値は数値が高いほど仲間から受容される程度が高いことを表わす一次元の指標である。平均評定値は同性仲間全員の評定に基づくので、肯定的指名や否定的指名の少ないN児群でも平均評定値は比較的高い場合がある(前田, 1994; 前田・片岡, 1993)。

(3)仲間知覚尺度得点：L得点と同様に、項目別に同性仲間一人当たりからの指名数を求め、それを標準得点へ変換した。小3～小6の全員(N=459)の標準得点に基づいて9項目に関する主因子分析を行った。その結果、直交バリマックス回転後の第I因子を構成する項目とその因子負荷量は項目2(.85), 項目4(.89), 項目7(.82)であった。これら3項目から成る第I因子を「攻撃性」因子と命名した。同様に項目1(.83), 項目6(.79), 項目8(.79)の3項目から成る第II因子を「引っ込み思案」因子, 項目3(.69), 項目5(.80), 項目9(.84)の3項目から成る第III因子を「社会的コンピタンス」因子と命名した。これら3因子で全分散の69%を説明していた。対象児ごとに、各因子を構成する3項目ずつの標準得点の平均値を算出し、それを学年別・性別に再度標準得点へ変換して攻撃性尺度(以下

AG尺度と略す), 引っ込み思案尺度(以下WD尺度と略す)および社会的コンピタンス尺度(以下SC尺度と略す)の各得点を構成し、以下の分析で使用した。なお小3～小6の男子全体(N=231), 女子全体(N=228)および各学年の男女全体のそれぞれについても同様の因子分析を行った。その結果、いずれの因子分析においても同様の3項目ずつから成る3因子が抽出され、これら3因子で全分散の69%～73%を説明していた。

(4)自己知覚尺度得点：仲間知覚の3尺度のそれぞれを構成する3項目ずつに対応させて、3項目ずつの自己評定値を加算して各尺度得点とした。したがって、自己知覚の各尺度得点は3点～9点の範囲にわたり、得点は多いほど各尺度の傾向が強いと自己評定していることを意味する。

(5)孤独感得点：11項目の自己評定値を加算し、その合計得点を孤独感得点とした。項目1, 2, 4, 5, 7, 10, 11は逆転項目であり、評定値3を1点, 評定値2を2点, 評定値1を3点へと変換して加算した。したがって、孤独感得点は11点～33点の範囲にわたり、得点は多いほど孤独感が強いことを意味する。Cronbachの α 係数を算出して孤独感項目の内的一貫性を検討したところ、男女全体(N=459)で $\alpha=.83$, 男子全体(N=231)で $\alpha=.84$, 女子全体(N=228)で $\alpha=.83$ であった。

(6)自己知覚の正確度得点：まず自己知覚の各尺度得点を学年別・性別に標準得点へ変換した。次に、この各標準得点から、それに対応する仲間知覚の各尺度得点の標準得点を減算して、両標準得点間のズレ得点を求めた。仲間知覚は子どもの実際の社会的行動特徴を完全に評価するものではないが、多数の仲間の見方を集約したものであり、比較的客観性が高いと考えた。したがって、ズレ得点が+の場合はその尺度について自己を過大に評価していることを意味し、反対に-の場合は自己を過小評価していることを意味する。

地位群と下位群の分類方法 地位群の分類はCoie & Dodge (1988)の分類方法に従った。L得点, D得点, SP得点およびSI得点に基づいて、各対象児を5つの地位群のいずれかに分類した。各地位群の分類基準はP児群(SP>1, L>0, D<0), R児群(SP<-1, L<0, D>0), A児群(-1<SP<1, -1<SI<1), N児群(SI<-1, L<0, D<0), C児群(SI>1, L>0, D>0)であった。学年を一括した各地位群の人数内訳を示すと、次のとおりである。P児群(男59, 女65, 全体124), R児群(男42, 女56, 全体98), A児群(男76, 女56, 全体132), N児群(男45, 女43, 全体88), C児群(男9, 女8, 全体17)。下位群については

C児群を除く4つの地位群の中から、さらに次の基準を満たす者を選出して8つの下位群を構成した。仲間知覚のAG尺度得点、WD尺度得点およびSC尺度得点(いずれも標準得点)をそれぞれAZ, WZ, CZで表わすと、8つの下位群の分類基準は次のとおりである。HCP群(AZ<0, WZ<0, CZ>0.5), LCP群(AZ<0, WZ<0, CZ<0), AR群(AZ>0.5, WZ<0, CZ<0), WR群(AZ<0, WZ>0.5, CZ<0), AWR群(AZ>0.5, WZ>0.5, CZ<0), HWN群(AZ<0, WZ>0.5, CZ<0), LWN群(AZ<0, WZ<0, CZ<0), TA群(-0.5<AZ<0.5, -0.5<WZ<0.5, -0.5<CZ<0.5)。なお各下位群の分類基準は人数確保のため、相対的に決定された。各下位群の人数内訳は次のとおりである。HCP群(男25, 女26, 全体51), LCP群(男11, 女14, 全体25), AR群(男11, 女22, 全体33), WR群(男3, 女8, 全体11), AWR群(男7, 女3, 全体10), HWN群(男10, 女7, 全体17), LWN群(男15, 女22, 全体37), TA群(男6, 女10, 全体16)。

結 果

以下の分析では、学年と性別を一括した全体の人数に基づいて、得点別に各群の平均値間の有意差検定を行った。分散の群間等質性が保証されるときには1要因分散分析を適用した後、Duncan法を使用して各群間の差を検定した。分散の群間等質性が保証されないときにはWelch法を含むt検定を使用して各群間の差を検定し、その結果をまとめて報告する。なお、t検定を使用する場合には第1種誤差の生じる確率を考慮して有意水準を $p<0.02$ 以下に設定した。

地位群間の比較

(1)ソシオメトリック指名得点：地位群の分類に使用したL得点、D得点、SP得点、SI得点別に5地位群間の差を検定し、地位群分類の操作チェックを行った。t検定の結果をまとめると、L得点ではP児群($M=1.25$, $SD=0.72$)やC児群($M=0.94$, $SD=0.64$)が他の3群よりも、A児群($M=-0.06$, $SD=0.34$)がN児群($M=-0.81$, $SD=0.32$)やR児群($M=-0.91$, $SD=0.33$)よりも有意に多かった(いずれも $p<0.001$)。D得点ではR児群($M=1.49$, $SD=1.14$)が最も多く、C児群($M=0.81$, $SD=0.58$)、A児群($M=-0.29$, $SD=0.36$)、N児群($M=-0.52$, $SD=0.26$)、P児群($M=-0.62$, $SD=0.19$)の順に少なくなり、いずれの群間差も有意であった(N児群>P児群は $p<0.01$; 他は $p<0.001$)。SP得点ではP児群($M=1.87$, $SD=0.71$)が他の4群よりも、A児群($M=0.23$, $SD=0.51$)がN児群($M=-0.29$, $SD=0.53$)やR児群($M=-2.41$, $SD=1.25$)よりも、C児群($M=0.13$, $SD=1.07$)やN児群がR児群よりも有意に多かった

(いずれも $p<0.001$)。SI得点ではC児群($M=1.75$, $SD=0.59$)が他の4群よりも、P児群($M=0.63$, $SD=0.78$)やR児群($M=0.58$, $SD=1.13$)がA児群($M=-0.34$, $SD=0.48$)やN児群($M=-1.34$, $SD=0.25$)よりも、A児群がN児群よりも有意に多かった(いずれも $p<0.001$)。これらの結果は、本研究の地位群分類に使用したソシオメトリック指名得点が各地位群を明確に分類していたことを確認するものである。

(2)ソシオメトリック平均評定値：t検定の結果をまとめると、P児群($M=2.55$, $SD=0.21$)は他の4群よりも(いずれも $p<0.001$)、A児群($M=2.29$, $SD=0.26$)はN児群($M=2.18$, $SD=0.25$)やR児群($M=1.75$, $SD=0.28$)よりも(順に $p<0.01$, $p<0.001$)、N児群やC児群($M=2.15$, $SD=0.26$)はR児群よりも(いずれも $p<0.001$)有意に多かった。

(3)仲間知覚尺度得点：t検定の結果をまとめると、AG尺度得点ではR児群($M=1.07$, $SD=1.37$)やC児群($M=0.70$, $SD=1.04$)が他の3群よりも(C児群>A児群やC児群>N児群は $p<0.01$; 他は $p<0.001$)、A児群($M=-0.24$, $SD=0.61$)やN児群($M=-0.31$, $SD=0.57$)がP児群($M=-0.48$, $SD=0.38$)よりも(順に $p<0.001$, $p<0.02$)有意に多かった。WD尺度得点ではR児群($M=0.30$, $SD=1.15$)がN児群($M=0.20$, $SD=1.30$)を除く他の3群よりも(R児群>A児群は $p<0.01$; 他は $p<0.001$)、N児群がP児群($M=-0.23$, $SD=0.77$)やC児群($M=-0.44$, $SD=0.35$)よりも(順に $p<0.01$, $p<0.001$)、A児群($M=-0.07$, $SD=0.84$)がC児群よりも($p<0.01$)有意に多かった。SC尺度得点ではP児群($M=0.70$, $SD=1.18$)がC児群($M=0.67$, $SD=1.29$)を除く他の3群よりも(いずれも $p<0.001$)、C児群やA児群($M=-0.05$, $SD=0.87$)がそれぞれN児群($M=-0.40$, $SD=0.58$)やR児群($M=-0.57$, $SD=0.45$)よりも(C児群>N児群やC児群>R児群は $p<0.01$; 他は $p<0.001$)有意に多かった。

(4)自己知覚尺度得点：t検定の結果をまとめると、AG尺度得点ではC児群($M=4.59$, $SD=1.29$)やR児群($M=4.51$, $SD=1.43$)がP児群($M=3.83$, $SD=1.07$)よりも有意に多かった(順に $p<0.01$, $p<0.001$)。N児群($M=4.11$, $SD=1.24$)はA児群($M=4.13$, $SD=1.30$)と差がなかった。WD尺度得点ではN児群($M=4.48$, $SD=1.57$)がP児群($M=3.94$, $SD=1.09$)やC児群($M=3.71$, $SD=0.96$)よりも(順に $p<0.01$, $p<0.02$)、R児群($M=4.40$, $SD=1.35$)がP児群よりも($p<0.01$)有意に多かった。A児群($M=4.23$, $SD=1.33$)はいずれの群とも差がなかった。SC尺度得点では地位群の主効果が $F(4,454)=5.62$, $p<0.001$ で有意となり、C児群($M=6.35$, $SD=1.28$)が他の4群よりも(C児群>P児群は $p<0.05$; 他は $p<0.01$)、P児群($M=5.82$, $SD=1.28$)がR児群($M=5.14$, $SD=1.38$)よりも($p<0.05$)有意に多かった。

N児群 ($M=5.52, SD=1.37$) はA児群 ($M=5.39, SD=1.28$) と差がなかった。

(5)孤独感得点：t検定の結果をまとめると、R児群 ($M=17.15, SD=4.80$) が他の4群よりも ($R児群>N児群$ は $p<.02$; 他は $p<.001$)、N児群 ($M=15.53, SD=3.86$) やA児群 ($M=15.17, SD=3.50$) がP児群 ($M=13.70, SD=2.32$) よりも (いずれも $p<.001$)有意に多かった。C児群 ($M=13.88, SD=2.87$) はA児群やP児群と差がなかった。

(6)自己知覚の正確度得点：t検定の結果をまとめると、AG尺度のズレ得点ではC児群 ($M=-0.29, SD=0.93$) を除く他の3群がR児群 ($M=-0.77, SD=1.46$) よりも (いずれも $p<.001$)、P児群 ($M=0.23, SD=0.77$) がC児群よりも ($p<.02$) 有意に多かった。N児群 ($M=0.25, SD=0.90$) はA児群 ($M=0.23, SD=1.04$) と差がなかった。WD尺度のズレ得点では、A児群 ($M=0.08, SD=1.12$)、P児群 ($M=0.04, SD=0.95$)、C児群 ($M=0.00, SD=0.72$)、N児群 ($M=-0.01, SD=1.45$)、R児群 ($M=-0.17, SD=1.31$) のいずれの群間差も有意でなかった。SC尺度のズレ得点ではN児群 ($M=0.43, SD=1.07$) がA児群 ($M=-0.03, SD=1.16$) よりも ($p<.01$)、C児群 ($M=-0.09, SD=1.68$) を除く他の3群がP児群 ($M=-0.48, SD=1.20$) よりも ($A児群>P児群$ は $p<.01$; 他は $p<.001$) 有意に多かった。R児群 ($M=0.28, SD=0.95$) はA児群よりも多い傾向 ($p<.05$) にあった。

下位群間の比較

下位群間比較では主に各下位群とTA群間の比較および同一地位群の下位群間比較 (HCP群とLCP群の比較、AR群とWR群およびAWR群の3群間比較、HWN群とLWN群の比較) の結果について報告する。

(1)ソシオメトリック指名得点：t検定の結果をまとめると、L得点ではHCP群 ($M=1.45, SD=0.76$) やLCP群 ($M=1.06, SD=0.54$) がTA群 ($M=0.03, SD=0.37$) よりも有意に多く (いずれも $p<.001$)、他の5群がTA群よりも有意に少なかった (いずれも $p<.001$)。またHCP群とLCP群間差、AR群 ($M=-0.88, SD=0.32$)、WR群 ($M=-0.97, SD=0.32$)、AWR群 ($M=-1.10, SD=0.27$) の3群間差およびHWN群 ($M=-0.96, SD=0.31$) とLWN群 ($M=-0.77, SD=0.32$) 間差はいずれも有意でなかった。D得点ではAWR群 ($M=3.66, SD=1.29$)、AR群 ($M=1.43, SD=0.86$)、WR群 ($M=1.08, SD=0.65$) の3群がTA群 ($M=-0.36, SD=0.22$) よりも有意に多く (いずれも $p<.001$)、LCP群 ($M=-0.55, SD=0.23$)、LWN群 ($M=-0.57, SD=0.26$)、HCP群 ($M=-0.62, SD=0.16$) の3群がTA群よりも有意に少なかった (順に $p<.02, p<.01, p<.001$)。HWN群 ($M=-0.39, SD=0.30$) はTA群と差がなかった。またAWR群

はAR群やWR群よりも有意に多かった (いずれも $p<.001$)。SP得点ではHCP群 ($M=2.07, SD=0.75$) やLCP群 ($M=1.61, SD=0.47$) がTA群 ($M=0.39, SD=0.42$) よりも有意に多く (いずれも $p<.001$)、他の5群がTA群よりも有意に少なかった (いずれも $p<.001$)。またHCP群はLCP群よりも ($p<.01$)、WR群 ($M=-2.05, SD=0.72$) やAR群 ($M=-2.31, SD=0.93$) はAWR群 ($M=-4.76, SD=1.38$) よりも (ともに $p<.001$) 有意に多かった。HWN群 ($M=-0.57, SD=0.54$) はLWN群 ($M=-0.20, SD=0.54$) と差がなかった。SI得点ではAWR群 ($M=2.55, SD=1.25$)、HCP群 ($M=0.84, SD=0.81$)、AR群 ($M=0.54, SD=0.91$)、LCP群 ($M=0.50, SD=0.68$) の4群がTA群 ($M=-0.33, SD=0.45$) よりも有意に多く (いずれも $p<.001$)、LWN群 ($M=-1.34, SD=0.23$) やHWN群 ($M=-1.36, SD=0.26$) がTA群よりも有意に少なかった (いずれも $p<.001$)。またAWR群はAR群やWR群 ($M=0.11, SD=0.73$) よりも有意に多かった (いずれも $p<.001$)。

(2)ソシオメトリック平均評定値：分散分析の結果、下位群の主効果が $F(7,192)=96.28, p<.001$ で有意となり、HCP群 ($M=2.64, SD=0.19$) やLCP群 ($M=2.49, SD=0.17$) がTA群 ($M=2.34, SD=0.22$) よりも有意に多く (順に $p<.01, p<.05$)、HWN群 ($M=1.99, SD=0.27$)、WR群 ($M=1.83, SD=0.15$)、AR群 ($M=1.68, SD=0.22$)、AWR群 ($M=1.44, SD=0.13$) の4群がTA群よりも有意に少なかった (いずれも $p<.01$)。またHCP群はLCP群よりも ($p<.05$)、LWN群 ($M=2.27, SD=0.23$) はHWN群よりも ($p<.01$)、WR群はAR群やAWR群よりも (順に $p<.05, p<.01$)、AR群はAWR群よりも ($p<.01$) 有意に多かった。

(3)仲間知覚尺度得点：t検定の結果をまとめると、AG尺度得点ではAWR群 ($M=2.22, SD=1.24$) やAR群 ($M=2.12, SD=1.01$) がTA群 ($M=-0.20, SD=0.26$) よりも有意に多く (いずれも $p<.001$)、他の5群はTA群よりも有意に少なかった ($TA群>WR群$ は $p<.02$; 他は $p<.001$)。またAWR群やAR群はWR群 ($M=-0.46, SD=0.23$) よりも有意に多かった (いずれも $p<.001$)。HCP群 ($M=-0.57, SD=0.20$) とLCP群 ($M=-0.56, SD=0.16$) 間およびHWN群 ($M=-0.54, SD=0.20$) とLWN群 ($M=-0.50, SD=0.23$) 間には差がなかった。WD尺度得点ではHWN群 ($M=2.26, SD=1.19$)、WR群 ($M=2.25, SD=1.08$)、AWR群 ($M=1.65, SD=0.94$) がTA群 ($M=-0.24, SD=0.22$) よりも有意に多く (いずれも $p<.001$)、他の4群はTA群よりも有意に少なかった ($TA群>AR群$ や $TA群>LWN群$ は $p<.01$; 他は $p<.001$)。またHWN群はLWN群 ($M=-0.49, SD=0.28$) よりも ($p<.001$)、WR群やAWR群はAR群 ($M=-0.44,$

SD=0.22)よりも(いずれも $p<.001$)有意に多かった。HCP群($M=-0.57, SD=0.19$)とLCP群($M=-0.50, SD=0.22$)間には差がなかった。SC尺度得点ではHCP群($M=1.70, SD=1.04$)がTA群($M=-0.20, SD=0.29$)よりも有意に多く($p<.001$)、他の6群はTA群よりも有意に少なかった(TA群>LCP群は $p<.02$; TA群>HWN群は $p<.01$; 他は $p<.001$)。またHCP群はLCP群($M=-0.41, SD=0.22$)よりも有意に多かった($p<.001$)。AR群($M=-0.64, SD=0.22$)、WR群($M=-0.67, SD=0.21$)、AWR群($M=-0.80, SD=0.11$)の3群間およびHWN群($M=-0.57, SD=0.31$)とLWN群($M=-0.61, SD=0.21$)の2群間には差がなかった。

(4)自己知覚尺度得点：t検定の結果をまとめると、AG尺度得点ではいずれの下位群もTA群($M=4.06, SD=0.97$)との間に有意差はなかった。またAWR群($M=4.90, SD=0.94$)やAR群($M=4.79, SD=1.61$)はWR群($M=3.55, SD=0.66$)よりも有意に多かった(いずれも $p<.01$)。HCP群($M=3.73, SD=1.01$)とLCP群($M=3.80, SD=0.89$)間およびHWN群($M=3.71, SD=1.02$)とLWN群($M=4.08, SD=1.08$)間には差がなかった。WD尺度得点ではHWN群($M=5.29, SD=1.23$)がTA群($M=4.19, SD=1.24$)よりも($p<.02$)、WR群($M=5.55, SD=1.56$)がAR群($M=4.21, SD=1.25$)よりも($p<.01$)有意に多かった。HCP群($M=3.73, SD=0.99$)、LCP群($M=4.08, SD=1.02$)、AWR群($M=5.00, SD=1.00$)、LWN群($M=4.46, SD=1.67$)はいずれもTA群と差がなかった。SC尺度得点では下位群の主効果が $F(7,192)=6.98, p<.001$ で有意となり、HCP群($M=6.43, SD=1.14$)がTA群($M=5.44, SD=1.00$)よりも有意に多く($p<.05$)、AWR群($M=4.50, SD=1.28$)がTA群よりも有意に少なかった($p<.05$)。またHCP群はLCP群($M=5.16, SD=1.08$)よりも($p<.01$)、LWN群($M=5.81, SD=1.35$)はHWN群($M=4.77, SD=1.06$)よりも($p<.05$)有意に多かった。AR群($M=5.21, SD=1.43$)やWR群($M=5.09, SD=0.79$)はTA群と差がなかった。

(5)孤独感得点：t検定の結果をまとめると、AWR群($M=20.00, SD=4.80$)、WR群($M=19.46, SD=4.83$)、HWN群($M=17.82, SD=3.85$)の3群はTA群($M=14.81, SD=2.46$)よりも有意に多く、HCP群($M=13.26, SD=2.08$)はTA群よりも有意に少なかった(いずれも $p<.02$)。またHWN群はLWN群($M=14.68, SD=3.56$)よりも有意に多かった($p<.01$)。LCP群($M=14.04, SD=2.51$)やAR群($M=16.58, SD=4.71$)はTA群と差がなかった。

(6)自己知覚の正確度得点：t検定の結果をまとめる

と、AG尺度のズレ得点ではAR群($M=-1.60, SD=1.29$)やAWR群($M=-1.64, SD=1.22$)がTA群($M=0.27, SD=1.07$)よりも有意に少なく(ともに $p<.001$)、WR群($M=0.03, SD=0.54$)がAR群やAWR群よりも有意に多かった(順に $p<.001, p<.01$)。HCP群($M=0.23, SD=0.82$)とLCP群($M=0.30, SD=0.81$)間およびHWN群($M=0.13, SD=0.74$)とLWN群($M=0.42, SD=0.91$)間には差がなかった。WD尺度のズレ得点ではAWR群($M=-1.00, SD=1.12$)、WR群($M=-1.22, SD=1.42$)、HWN群($M=-1.45, SD=1.62$)の3群がTA群($M=0.12, SD=0.77$)よりも有意に少なく(順に $p<.01, p<.02, p<.01$)、LWN群($M=0.66, SD=1.14$)がHWN群よりも($p<.001$)、AR群($M=0.38, SD=0.98$)がAWR群やWR群よりも(ともに $p<.001$)有意に多かった。HCP群($M=0.24, SD=0.81$)とLCP群($M=0.41, SD=0.91$)間には差がなかった。SC尺度のズレ得点ではLWN群($M=0.84, SD=1.01$)がTA群($M=0.11, SD=0.78$)よりも有意に多く($p<.02$)、HCP群($M=-1.01, SD=1.25$)がTA群よりも有意に少なかった($p<.01$)。またLCP群($M=0.13, SD=0.78$)はHCP群よりも($p<.001$)、LWN群はHWN群($M=0.02, SD=0.67$)よりも($p<.01$)有意に多かった。AR群($M=0.38, SD=0.99$)、WR群($M=0.34, SD=0.59$)、AWR群($M=0.03, SD=0.90$)の3群間には差がなかった。

考 察

まず地位群間比較の結果から考察する。孤独感得点の平均値順位はR児群が最も多く、N児群とA児群が中間で、C児群とP児群が少なかった。この結果は、C児群を除く4群を比較した佐藤他(1990)や5群を比較したAsher & Wheeler (1985)の順位とほぼ一致している。Crick & Ladd (1993)は小3と小5を対象にして、Parkhurst & Asher (1992)は中学生を対象にしてR児群、N児群、A児群、C児群、P児群の順位を見出しており、本研究の順位とすべて一致している。Cassidy & Asher (1992)は幼稚園児と小1を対象にしてR児群、C児群、N児群、A児群、P児群の順位を見出している。これらの研究は群間差の有無に多少相違があるものの、幼稚園児から中学生にかけて孤独感はR児群が最も多く、P児群が最も少なく、A児群やN児群はその中間にあることを示している。この点で本研究の結果は以前の研究結果と一致するものであり、予想(1)を支持すると共に、地位群間比較の一般的な結果を示すものといえる。

攻撃性の仲間知覚はR児群やC児群が多く、P児群が最も少なかった。引込み思案ではR児群やN児群

が多く、C児群が最も少なかった。社会的コンピタンスではP児群やC児群が優れ、N児群やR児群が乏しかった。これらの結果も、以前の研究結果(Coie & Dodge, 1988; 前田, 1994; 前田・片岡, 1993; 佐藤他, 1988) とほぼ一致し、本研究の予想(2)を確認するものであった。本研究からP児群、R児群およびN児群の結果を取り出して佐藤他(1988)の結果と比較すると、いずれの尺度得点でも3群の平均値順位は両研究間で一致している。小1と小3を対象に5群間で比較したCoie & Dodge(1988)によると、攻撃因子得点はR児群やC児群が多く、A児群やP児群が中間で、N児群が最も少なかった。また「協調性」や「リーダー」の項目から成る向社会的因子得点ではP児群が最も多く、C児群、A児群、R児群、N児群の順に少なかった。いずれも第4位と第5位が逆になる点を除くと、これらの結果は本研究の順位と一致する。幼児の攻撃性もC児群やR児群が多く、引っ込み思案ではR児群がP児群よりも多いかその傾向にあり、社会的コンピタンスではP児群が最も多く、R児群が最も少なく、他の3群はその中間にあった(前田, 1994; 前田・片岡, 1993)。これらの結果と本研究結果を総合すると、幼児から小学生にかけて仲間の見方は比較的一貫していることが分かる。R児群やC児群の攻撃性は強く、P児群やC児群の社会的コンピタンスは高いと見られている。引っ込み思案は仲間から気づかれにくいいためか、幼児では顕著な群間差は見られない。仲間は小学生になってから次第にN児群やR児群の引っ込み思案傾向に気づき始めるのではないかと考えられる。

自己知覚では、C児群やR児群がP児群よりも攻撃的であると自己評定していた。しかし攻撃性のズレ得点から分かるように、C児群やR児群の自己知覚はまだ不正確であり、仲間知覚よりも自己の攻撃性を過小評価する傾向にあった。特に、R児群の過小評価は顕著であった。彼らは攻撃性の程度や仲間への影響を十分に自覚していないので、自己の攻撃的行動を改めず、結果的に仲間から拒否されるのではないかと考えられる。C児群やP児群はR児群よりも自己の社会的コンピタンスを高く評定していたが、それでも仲間知覚と比べると、まだ自己を過小評価する傾向にあった。自己を過大評価したのはN児群とR児群であった。N児群は自分では社会的コンピタンスがあると見ているが、それを仲間関係の中で発揮しないために仲間から認められないのであろう。これらの結果から、R児群は攻撃性と社会的コンピタンスの両面で不正確な自己知覚をしているが、C児群は自己の社会的コンピタンスを

正確に知覚していることが分かる。この相違がおそらく、C児群はR児群と同様に攻撃性を示しながらも、R児群ほど仲間から一貫して拒否されない理由ではないかと考えられる。N児群やR児群はP児群やC児群よりも引っ込み思案であると自己評定する傾向にあった。しかし、ズレ得点はいずれの群も0に近い値を示し、5群とも仲間知覚と一致する正確な自己知覚をしていた。引っ込み思案の仲間知覚はR児群でも比較的低い値を示しており、攻撃性に比べると仲間から気づかれにくいようである。しかし、本人は自分の引っ込み思案傾向を自覚しやすいので、N児群やR児群でも仲間知覚と自己知覚のズレが小さくなったのであろう。要するに、N児群の結果を除くと、これらの結果は本研究の予想(3)をほぼ支持するものであった。

次に、下位群間比較の結果について考察する。R児群の中でもAWR群とWR群の孤独感はTA群よりも強かったが、AR群はTA群と差がなかった。同様に、N児群の中でもHWN群の孤独感はLWN群よりも強かった。これらの結果は本研究の予想(4)を支持し、R児群だけでなく、N児群も等質な群でないことを示している。その意味で、R児群だけを下位群に分類する見解(Asher, et al., 1990)は今後修正され、他の地位群にも拡大適用される必要があると指摘できる。AR群の孤独感はTA群と差がないのに、なぜWR群やAWR群の孤独感はTA群よりも強いのであろうか。この点に関連して、Asher, et al. (1990)は次の2つの理由を挙げている。第1に、攻撃的R児群は服従的R児群よりも仲間から極端に拒否されることが少なく、実際に友人の数も多いのではないかと考えている。第2に、攻撃的R児群は服従的R児群よりも不正確な自己知覚を示し、自己のコンピタンスを過大評価するからではないかという。第1の理由については、本研究でもソシオメトリック指名得点や平均評定値の結果から、ある程度検討できる。L得点ではR児群の3つの下位群間に有意差はなく、3群ともTA群よりも好かれていなかった。D得点ではAWR群が最も拒否され、AR群とWR群には有意差が見られなかった。しかし、平均評定値ではWR群が最も受容され、次にAR群となり、AWR群が最も受容されていなかった。これらの結果は、AWR群が最も仲間から受容されず拒否されやすい存在であることを示している。したがって、AWR群の孤独感が強いのは、仲間から極端に拒否された結果であるといえるかもしれない。しかし、AR群とWR群には差がないか、むしろWR群の方が仲間から受容されていたので、第1の理由からAR群

の孤独感がWR群よりも少ないことをうまく説明できない。

第2の理由については、本研究の自己知覚およびズレ得点の結果から、ある程度検討できる。AR群やAWR群はWR群よりも攻撃的であると自己評定していた。これは仲間知覚と対応しているが、AR群やAWR群のズレ得点は大きな負の値を示しており、仲間知覚よりも自己の攻撃性をかなり過小評価していた。逆に、WR群はAR群よりも引っ込み思案であると自己評定していた。これも仲間知覚と対応しているが、WR群やAWR群のズレ得点は大きな負の値を示しており、仲間知覚よりも自己の引っ込み思案を過小評価していた。AR群、WR群、AWR群の3群は社会的コンピタンスの仲間知覚、自己知覚および両知覚のズレには差がなかった。これらの結果は本研究の予想(5)と(6)の一部を支持すると共に、仲間知覚と比べてAR群は攻撃的でなく、WR群は引っ込み思案でないと自己知覚するが、AWR群は否定的特徴である攻撃性と引っ込み思案の両面で不正確な自己知覚に陥りやすいことを示している。このように第2の理由からも、仲間知覚とのズレが最も大きいAWR群は仲間から受容されず、その結果として強い孤独感を示すと解釈できる。それでは、AR群とWR群の孤独感の相違をどのように解釈したらよいのであろうか。おそらく、不正確な自己知覚でも攻撃性と引っ込み思案では彼らの仲間関係に異なる影響を及ぼすのであろう。AR群は引っ込み思案でないと自己知覚しているので、積極的に仲間とかかわる可能性が強い。そのために孤独感を感じないですむのかもしれない。それに対して、WR群は引っ込み思案であると自己知覚しているだけでなく、仲間もそれ以上に彼らを引っ込み思案であると見ていた。WR群は自分から仲間とかかわることも仲間から誘われることも少なく、強い孤独感を抱くのではなからうか。この解釈は、N児群の中でも引っ込み思案の自己評定が高く、ズレ得点も大きいHWN群がLWN群よりも孤独感を強く報告するという事実もうまく説明できる。

本研究では、P児群やN児群の下位群間にもいくつかの有意差が見られた。HCP群はLCP群よりも、LWN群はHWN群よりも社会的コンピタンスを高く自己知覚したが、これらの自己知覚はHCP群では過小評価の傾向にあり、LWN群は過大評価の傾向にあった。それに対して、LCP群とHWN群は比較的正確な自己知覚をしていた。また、LWN群とHWN群は引っ込み思案の自己知覚に差がなかったが、ズレ得

点ではLWN群が過大評価を示すのに対して、HWN群は過小評価を示した。これらの結果は本研究の予想(5)と(6)をほぼ確証するものであり、今後はP児群やN児群についても下位群間比較を行う必要があることを示唆する。たとえば、LCP群とLWN群の攻撃性、引っ込み思案、社会的コンピタンスはいずれもTA群よりも低いと仲間から見られていたが、LCP群は仲間から好かれ、LWN群は仲間から無視されやすい子どもたちであった。仲間を受け入れる寛容さ、あるいは学業的・運動的コンピタンスなど本研究で取り上げなかった他の要因も彼らの人気度や仲間関係に関与しているに違いない。これらの要因についても各下位群の特徴を明らかにしなければならない。

引用文献

- Asher, S.R., & Parker, J.G. 1989 Significance of peer relationship problems in childhood. In B. H. Schneider, G. Attili, J. Nadel & R.P. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective*. pp. 5—23. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Asher, S.R., Parkhurst, J.T., Hymel, S., & Williams, G.A. 1990 Peer rejection and loneliness in childhood. In S.R. Asher & J.D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 253—273. Cambridge : Cambridge University Press.
- Asher, S.R., & Wheeler, V.A. 1985 Children's loneliness : A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 500—505.
- Bierman, K.L., Smoot, D.L., & Aumiller, K. 1993 Characteristics of aggressive-rejected, aggressive (nonrejected), and rejected (nonaggressive) boys. *Child Development*, **64**, 139—151.
- Cassidy, J., & Asher, S.R. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, **63**, 350—365.
- Coie, J.D., & Dodge, K.A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school : A cross-age comparison. *Child Development*, **59**, 815—829.
- Coie, J.D., Dodge, K.A., & Kupersmidt, J.B. 1990 Peer group behavior and social status. In S.R. Asher & J.D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17—59. Cambridge : Cambridge

- University Press.
- Crick, N.R., & Ladd, G.W. 1993 Children's perceptions of their peer experiences : Attributions, loneliness, social anxiety, and social avoidance. *Developmental Psychology*, **29**, 244—254.
- Hymel, S., Bowker, A., & Woody, E. 1993 Aggressive versus withdrawn unpopular children : Variations in peer and self-perceptions in multiple domains. *Child Development*, **64**, 879—896.
- 前田健一 1994 幼児の仲間関係に関する研究 —社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメントの地位群間比較と下位群間比較— 愛媛大学教育学部紀要, 第I部教育科学, **41**, 1, 71—88.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, **41**, 152—160.
- 前田健一・高橋珠紀 1993 孤立しやすい幼児の社会的スキル訓練研究 愛媛大学教育学部紀要, 第I部教育科学, **40**, 1, 47—59.
- Matson, J.L., & Ollendick, T.H. 1988 *Enhancing children's social skills assessment and training*. New York : Pergamon Press. 佐藤容子・佐藤正二・高山巖(訳) 1993 子どもの社会的スキル訓練 —社会性を育てるプログラム— 金剛出版
- McConnell, S.R., & Odom, S.L. 1986 Sociometrics : Peer-referenced measures and the assessment of social competence. In P.S. Strain, M.J. Guralnick, & H.M. Walker (Eds.), *Children's social behavior : Development, assessment, and modification*. pp. 215—284. Orlando : Academic Press.
- Parkhurst, J.T., & Asher, S.R. 1992 Peer rejection in middle school : Subgroup differences in behavior, loneliness, and interpersonal concerns. *Developmental Psychology*, **28**, 231—241.
- Patterson, C.J., Kupersmidt, J.B., & Griesler, P.C. 1990 Children's perceptions of self and of relationships with others as a function of sociometric status. *Child Development*, **61**, 1335—1349.
- Pope, A.W., McHale, S.M., & Craighead, W.E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. New York : Pergamon Press.
- 高山巖(監訳) 佐藤正二・佐藤容子・前田健一(訳) 1992 自尊心の発達と認知行動療法 —子どもの自信・自立・自主性をたかめる— 岩崎学術出版社
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993a 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練 —社会的孤立行動の修正— 行動療法研究, **19**, 1—12.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1988 仲間関係に問題をもつ子ども —仲間アセスメントによる分析— 宮崎大学教育学部紀要, 教育科学, **63**, 17—23.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1990 仲間関係に問題をもつ子ども —自己知覚測度による分析— 宮崎大学教育学部紀要, 教育科学, **68**, 9—18.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1993b 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練 —コーチング法の使用と訓練の般化性— 行動療法研究, **19**, 13—27.

付 記

本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属小学校の先生方並びに児童の皆さんに心からお礼申し上げます。

(1994.11.16受稿, '95.4.3受理)